

第4回日中建築・住宅技術交流会議（WCC 会議） ～帰朝座談会～

日時：2010年9月28日（火）

場所：財団法人日本建築センター 5G 会議室

座談会参加者

石渡直明（三菱化学株式会社）：

2000年くらいから業務上中国との関係が始まる。現在は月に1回から2回は訪中する。大連、北京、上海、広州などの沿岸部の都市が多い。

菊池浩（旭ファイバーグラス株式会社）：

2009年に海外事業部の責任者となり、毎月1回のペースで様々な都市を訪問している。

須藤千香子（株式会社日本建築住宅センター）：

今回が初めての訪中。中国以外の国は、アジアや欧州に何度も渡航。欧州には滞在の経験がある。

吉田備実（ミサワホーム株式会社）：

訪中は3回目。2003年と2005年に山東省と天津、上海等の都市を視察した。その時の目的は、工場視察や部品・部材の視察が主。

司会 事務局

座談会参加者のプロフィールの詳細は会報誌「日中建築住宅情報」No.188 10・11月号を参照下さい。

会議について

今回の訪中は、2日間にわたる会議に参加することが目的の一つでした。中国側から5テーマ、日本側からは国土交通省、経済産業省そして日中建協を含めて6テーマが発表され、2日目の最後にはパネルディスカッションも行われました。

このような会議への参加の重要なポイントは、人との交流と普段の出張では見られないようなところの視察にあります。訪中団員間の交流もしかり、中国側の人との交流もしかり。普段では会えないような方と交流が出来るのは意義が大きい。日系企業が現地の日系企業へコンタクトするのは容易ですが地元の企業へのアプローチは難しい。このような会議を利用して政府間のプラットフォームを利用すべき。

中華料理について

北京の昼食で食べた北京ダックは美味しかった。香草もOKだったのですが、川魚だけはちょっと苦手でした。天津では、「狗不理」というお店の天津名物のいろんな種類の肉まんは美味でした。天津では麻花（マーホア）という小麦の生地をねじり棒のようにして油で揚げた、大きなねじれたかりんとうのようなお菓子も有名だそうで、お土産に買いました。日本に戻ってからみんなで食べましたが結構好評でした。

毎回豪華な食事だったので美味しかったのですが、少し飽きてきた感がありました。5日目に大連に行って、その日の夜は日本食だったので大変嬉しかった。

その日は、大連に駐在されている方々を交えての食事会でしたが、駐在員の方と話が出来たことは有意義でした。駐在員の方は非常に大変だという事と非常に忙しいというのが印象です。日本では当たり前のことが中国ではそうでないという苦勞が大変で、例えば、日本では品質の問題というのはあまり苦勞する部分ではないけれども中国では常に品質の問題が心配だという事でした。工場の従業員の人の入れ替わりの多さも日本では無い苦勞です。

各都市の印象について

どこの都市にも共通の印象として、建築中の現場が非常に多いという事。会議の中国側の発表の中で、2015年には新築物件のうちの中国の建築物が世界の50%を占めるようになるという話がありましたが、なるほどという気もしました。



街中の至る所で建設現場が見られる

これだけの建設が行われているという事は、鉄骨やコンクリートや樹脂などの値段は、今後は中国が決めていくという事になるのではないのでしょうか。会議の発表では、都市部に7億人の人口がいて2億世帯ある。持ち家率は83.3%ということでした。

天津では濱海新区やその中のエコシティの開発計画を視察しましたが、規模の大きさに圧倒されました。さすが中国という感じ。大連や天津は北京や上海に比べて素朴な感じがあります。開発もこれからで、特に東北地方の発展はこれから進んでいくようです。

全体を通しての感想

今回の会議は4機関の主催として4回目となります。それまでも日中の2機関での会議が十数回にわたって行われてきた訳です。それらの経緯とご苦勞があつて初日に視察した内装付住宅の日中共同プロジェクトに至っています。何度も何度も行き来をした成果でありそれが無駄にはなっていないという事ですが、なかなかすぐには成果も出ません。民間企業では効率よく成果を求められるので、このような会議を活用させていただく事は意義があると思います。

北京での会議の期間中に日本から連絡があつて、中国である材料が使用禁止になるとの情報を受けました。すぐに中国側の会議参加者に問い合わせたところ確認のうえ連絡をいただくことになり、現在もやりとりを続けており業務に繋がっています。会議に参加していなければ、一民間企業としてこのように適切な人と繋がる事ができたかどうかは疑問です。

座談会の詳細は、会報誌「日中建築情報」No.188 10・11月号をご覧ください。